2013 年 4 月
文化人類学分野ウェブサイト・フォトエッセイ（中屋敷　千尋）

「関わるということ」

「君、どこの村の出身？」と、ある中年男性が不思議そうな顔をして私にたずねてきた。私は「日本人ですが…」とこたえながら、自分の服装をあらためて見なおした。彼は、私がパンジャビドレス（ドレスとパンツをあわせた民族衣装）を着ていたために、地元の人と勘違いした様子だった。尼寺での調査を断念し、調査村を探して村を転々としていたために疲れていた私は、「ホームステイがしたいのだけど、泊めてくれそうな家はないですかね」とおもいきって聞いてみた。すると男性は、「それならいい家族を知ってる」といって私をその家まで案内してくれた。その家の長男は、私を快く迎えいれてくれ、家族の人たちも私に興味をもってくれた。家族の人は、私に日本の生活についてたずねるだけではなく、自分たちが一風変わった日本人に会った経験や、お父さんが中国の軍隊に追われながらチベットから歩いてこの村まできたこと、お母さんはこの地方の出身でお父さんと恋愛結婚したこと、最近お母さんが高血圧なのが心配なことなど、色々な話をしてくれた。その後、私は数日この家にお世話になった。ホームステイ先のお母さんや娘、近所の女性たちは、「今夜は誕生日会があるから近所の人と一緒にいこう」とか、「今日は儀式があるから一緒に行こう」「一緒にお祭りを見に行ってみない？」、などことあるごとに私をいろいろな行事に誘ってくれ、私は誘われるがままに参加した。そして、その村がそのまま私の調査村となり、その家が村での私の居場所となった。

私がフィールドとして選んだのは、インドの北部、ヒマーチャル・プラデーシュ州の中国との国境付近にあるスピティ地方の一村である。ヒマラヤ山脈の中腹、標高 3500m に位置する。この地方は辺り一面岩の山に囲まれ、その間を一本の川が通っている。その川沿いに村が点在している。そのためスピティ渓谷とも呼ばれる。この地域は、乾燥が厳しく、寒冷な気候である。住民のほとんどはインド先住のチベット民で、ほとんどの人がチベット仏教を信仰している。言語は、チベット語の西部方言を話す。農業を営む人は少なく、商店やタクシードライバーなどの自営業や政府雇用の仕事につく人がほとんどである。

写真 1　調査地の村

私は尼寺での調査をあきらめたあとも、宗教実践について研究をしようと考えていた。しかし、日々の生活をする過程で気づいたことは、村の人びとの会話のなかで選挙のことが頻繁に話題になっていたことであった。「政治のせいで金が大量に入ってきた」「金のために人は選挙で争う」「選挙のせいで今は正直な人はいなくなってしまった」こんな嘆きにも似た言葉をよく耳にした。反近代的な価値観をもつチベット仏教徒という若干の理想をいだいて調査にきた私は、村に着いて 1 ヶ月足らずで、彼らが近代的なシステムをうけいれながら生活を営んでいることに気づかされた。そのひとつが選挙であった。当初私は、こんな人里離れた山奥の村で選挙のことがなぜ中心事になるのだろう？と不思議に思っているだけだった。だが、村での滞在が長くなるにつれ、この村をフィールドにする限り選挙に関する調査を避けて通ることはできないと思いはじめるようになった。最終的に私は、この予備調査を契機に修士論文のテーマを選挙に関わる人びとの実践へと変更することに決めた。

写真 2　投票日当日の投票所前での選挙活動

写真 3　投票会場

インドでは 5 年に一度選挙が行われる。村での選挙は、村長や村役員を決める村レベルのものから、国会議員を決めるような国レベルのものまである。そのなかでも村人がもっとも注目するのは村レベルの村役場の長、ならびに役員を選出する選挙である。ちょうど私が本調査をおこなっているときに、村役場の役員再選挙があり、選挙前後の人びとの様子を観察することができた。投票日の 1 ヶ月以上まえから村の人びとは選挙の時期や情勢について噂話をしはじめる。投票日がいつになりそうかという話や、立候補者を誰にするのかという話題で持ちきりとなる。私が驚いたのは、村の人びとが互いの行動を詳細に観察しているということであった。たとえばある村人は、「A はこちらの政党だが、昨日あちらの政党の人と話しているのを見た」という噂をしたかと思えば、ある村人は「最近こちらの政党員と話すときにぎこちないから、A はあちらの政党に傾いているに違いない！」な

どと噂する。

投票日の 1 週間前になり本格的な選挙活動が始まった。家族や近所の人たちは私を儀礼やお祭りには誘ってくれるが、選挙活動には誘ってくれなかった。そのためこちらから、活動になんとか参加させてもらえないかお願いをし、最終的にそれを聞き入れてもらって、私は政党員とともに選挙活動に同行するようになった。政党員は家を一軒ずつまわり、特定の候補者に投票してくれるようお願いをする。「私たちはニリンなのだから投票してくださいね」「あの家の人はニリンだから大丈夫だ」など、その活動に同行するなかで、ニリンという言葉を頻繁に耳にするようになった。ニリンとは一体何だろうか？政党員に同行して活動を観察する過程で日増しにその疑問は大きくなっていった。

村の人びとに、「ニリン」について何度となく聞いてみると、親族関係に関する用語らしいということがわかってきた。その後調査を続けるうちに、村に新しく入ってきた選挙という民主主義的なシステムと、これまでつみかさねられてきた親族関係を基盤にした社会的な関係やそれを支える論理が複雑に影響しあって、選挙があるたびに、村人にプレッシャーを与え、投票行動の決定を困難にし、人びとに不愉快な感情を引き起こしていることが明らかとなった。

それにしても、政治に興味がないどころか、迷惑さえしているという人々は、それにも関わらずなぜ選挙に関与するのだろうか。親族といえども関与しないという選択肢もあるのではないだろうか。このような私の素朴な疑問は、村人のニリンに対する考え方の対極にあるもののようであった。彼らは、ニリンについて「ニリンは助けあわなければならない」、「ニリンには人生を捧げなければならない」と語り、私が「それは困ったことがあったときにお互いに助け合う相互扶助のようなものか」とたずねると、彼らは「あなたがいっているような助けあいではない。私たちのいう助けあいは、本当の助けあい」と答えた。私は、正直なところよくわからないとおもった。

写真 4　結婚式などの行事には多くの親族が手伝いにくる

選挙の調査を進めるのと同時に、私には日々の近所のつきあいや寺院の僧侶とのつきあいもあった。スピティの人は、冬になると家族や親族の女性が羊毛をつかって編んだ靴下をはく。私には作ってくれる人がいなかったので一足も持っていなかったし、どうすることもできないので考えないようにしていた。村役場の役員の投票日が近づき、調査がますます緊張感を増し、私自身がかなり難しい立場にあったちょうどその時、私と親交のあった隣家の 40 歳代の女性が、私に手作りの靴下をプレゼントしてくれた。綺麗に編みこまれた靴下は、今までにみたどの靴下よりもすばらしいものに見えた。はいてみると、サイズもぴったりだった。私が知らない間にサイズを測って、時間をみつけて編んでくれたのか

と思うと胸が熱くなった。その数日後、今度は寺院で事あるごとに話しを聞かせてくれていた僧侶が、自分の家族に頼んで作ってもらった靴下を私にくださった。その時は、只々ありがたいと思い、毎日袋から出して靴下を眺めた。

選挙が終わって数日後、私は日本にいたときに申請していた奨学金に採用されていなかったことをメールで知って、かなり落ち込んでしまった。そんな私の様子をみて、友人が「奨学金がとれなくても大丈夫だよ。チヒロがスピティにきたら、みんな助けてくれるよ。お金なんてなくても大丈夫」と言ってくれた。奨学金に落ちて沈んでいた気持ちが一気に晴れたような気がした。今思い返すと、「助ける」という言葉が重い意味をもっていることを、私は自然とわかるようになっていたからうれしかったのだとおもう。

そして、調査がやっと終わり村から離れるとき、靴下をプレゼントしてくれた女性が「あなたがいなくなると辛い」といって涙を流した。私はそのことに驚くとともに、自分がこれまで生きてきたなかで、私のために涙を流してくれた人が何人いただろうか？と考えてしまった。そのときまでの私は、スピティを離れるのがさみしいと思う反面、本調査がやっと終わって村をでて帰国できることをよろこんでいた。

だが、彼女の様子をみてからは、私は、またここに来よう、とおもった。それと同時に、また来なければいけない、ともおもった。ホームステイ先の家族や、近所の靴下を作ってくれた女性、お世話になった僧侶、友人、調査を手伝ってくれた方々との関係を切ることはできないとおもった。この関係は、私が日々の生活（例えば、食事をつくったり、水をくみにいったり、洗濯したり、お祭りに行ったり、雑談したり、お寺に行く等）を過ごす過程で築きあげられたものであった。もちろん、その過程には、うれしいことや楽しいことばかりではなく、緊張感にみちていたり、ときには私自身の立場がむずかしいときもあった。だが、それらすべて含めて、私はこの関わりを続けざるをえないと考えるようになった。これは果たして私の意志なのだろうか。私には、選択の余地のないことのようにおもわれる。とくに、靴下をくれた女性には、また会いに行きたいし、行かないといけないし、何かあればかけつけたり、金銭的な援助をしなければいけない、と考えるようになった。選挙のときに聞いた「ニリンは助けあわないといけない」というのは、こういうことなのだろうか。漠然としてはいるが、このことについて、今後私は研究を進めたいと考えている。

フィールドに住む人びとと関わりながら生活することで、私の関心は宗教から政治、親族へと変わり、研究テーマもそれに沿って大きく変化した。このような状態だから、時おり、フィールドに振りまわされているような感覚におちいり、私自身が何を研究したいのかがわからなくなることもある。しかし、そもそも研究したいことはそれ自体独立して私の中に存在するのではなく、フィールドでの生活や人びととの関わりの中でつくられ続け、変わり続けていくものなのだと今はおもう。もちろん、こうやって関心やテーマが変わったり入り組んだりして難しくなっても研究を続けたいとおもえるのは、上述したようなフィールドの人たちとの付き合いがあったからであり、今後も関係を続けてきたいとおもえ

るからである。

写真 5　弟の靴下を編む女性（彼女は私のためにも靴下を編んでくれた）